

けいせいあわ なると

傾城阿波の鳴門

〔解説〕明和五年（一七六八）六月、竹本座初演。近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七らの合作。夕霧伊佐衛門を題材にした近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」をもとに、阿波徳島、玉木家のお家騒動を絡ませたものです。当時、阿波の浪人が、大坂玉造に仮住まいをして、詐欺・ゆすり・追いはぎなどを働いていました。ある日、順礼の子が、金を持つているのを知り、だまして家に連れ帰り、深夜しめ殺して、死体を畑へ埋めた。しかしこれが露見したため、召し捕られ、重罪に処せられた、という実説を取り入れています。

〔あらすじ〕阿波徳島玉木家の若殿が遊女におぼれているのに乗じて、悪家老の一味はお家横領を企てていました。同じく家老の桜井主膳はこの状態を憂えていたのですが、預かっていたお家の重宝「国次（くにつぐ）」の刀を盗まれてしまいます。この刀の探索の為、家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて、妻お弓とともに盗賊の仲間に入ります。ある日、十郎兵衛の留守に、順礼の子が門口にやってきました。お弓は、話を聞くうちに、国元に残してきた娘のおつるとわかりますが、親子と名乗ると盗賊の罪が娘にかかることを恐れ、一旦は追い返します。しかし、今、別れてはもう二度と会うことが出来ないと思ひ直し、おつるの後を追います。

順礼歌の段

へふるさとを、遙々こゝに、紀三井寺

「順礼に御報謝」

と、言ふも優しき国訛

「テモしほらしい順礼衆、ドレドレ報謝進ぜう」

と、盆に白米の志

「アイアイ、有がたうござります」

と、言ふ物腰から棲外れ

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御達、国はいづく」

と尋ねられ

「アイ、国は阿波の徳島でござります」

「何ぢや徳島、さつてもそれは、マア懐しい。わしが

生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順礼
さんすのか」

「イエイエ、その父様や母様に逢ひたさ故、それで
わし一人、西国するのでござります」

と、聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄
り

「ム、父様や母様に逢ひたさに、西国するとはど
うした訳ぢや、サそれが聞きたい、言ふて聞かしや
〜」

「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様
や母様も、わしを婆様に預けて、どこへやら往かし
やんしたげな。それでわたしは婆様の世話になつて
往たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見
たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります」

「ム、シテその親達の名は何というぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申しませう」

と、聞いて吃驚びっく

「ア、コレコレ、アノ父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、婆様に育てられてゐたとは、疑ひもない我が娘」

と、見れば見る程幼顔、見覚えのある額の黒子ほくろ

「ヤレ我子か、懐しや」

と言はんとせしが、『待て暫し』

「オ、それはまあまあ、年端も行かぬに遙々の所を、よう尋ねに出さつしやつたのう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて／＼飛立つ、サア、飛立つ様にあらうが、儘ならぬが世の憂きふし。身にも命にもかへて、可愛い子を振り捨て、国を立退く親御の心。よくよくの事であらう程に、酷い親と必ず必ず恨みぬ

がよいぞや」

「イエ／＼勿体ない、何の恨みませう。恨みる事はないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覚えず、余所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるならあの様に髪結うて貰はうものと、羨やましようござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす」と、泣いぢやくりするいちらしさ、母は心も消え入る思ひ

「さて／＼世の中に、親となり子と生るゝ程深い縁はなけれどもナア、親が死んだり子が先立つたり、思ふ様にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねても、顔も所も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事。もう尋ねずと、国へ往んだがよいわいの」

「イエ〜、恋しい父様や母様、たとへいつ迄か、
つてなど、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅
ぢやて、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝た
り、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩か
れたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所に
ゐたりや、こんな目には逢ふまい物を、何処にどう
してゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや逢ひたい事ぢ
や、逢ひたい」

と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね
「才、道理ぢや、可愛や、いぢらしや」

と、我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが。『是程
親を慕ふ子を、何とこの儘去なされう。いつそ打ち
明け名乗らうか、イヤイヤそれではこの子も同じ罪、
その時の悲しさを思ひ廻せば、去なすが為』と

「才、段々の様子を聞き、我が身の様に思はれて、

悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、
兎角命が物種。まめでさへありや、又逢はれまい物
でもない。コレ、仕付けぬ旅に身を痛め、煩ひでも出
りや悪い。何処をしやうどに尋ねうより、その婆様
の方へ去んでゐるとノ、追付け父様や母様が逢ひに
往てぢや程に、悪い事は言はぬ、悪い事は言はぬ、な
んの又このおばが、わが身の為にならぬ事を言ふて
よいものか、わが身の為にならぬ事を言ふてよいも
のかいの。思ひ直して、これから直ぐに国へ去んで、
随分まめで親達の尋ねて行かしやるを待つてゐるの
がよいぞや」

と、宥めすかすを聞き分けて

「アイ、忝なうござります。お前がその様に言ふて
泣いて下さりますによつて、どうやら母様の様に思
はれて、わしやこゝが去にとむない。申しお家様、ど

んな事など致しませう程に、お前の御傍にいつ迄も、わたしを置いて下さりませ」

「エ、悲しい事を言ひ出して、又このおばを泣かすのか、泣かすのかいの。さつきにからわしもわが子、サア、わが子の様に思ふて、こゝに置きたい、去なしとむないと、様々思ひ廻せども、こゝに置いてはどうも為にならぬ事があるによつて、それでつれなふ去なすのぢや程にの、聞分けて去んだがよいぞや」と言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを喜ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で

「コレ、何ぼ一人旅でも、たとと錢さへやりや泊める。わづかなれども志、この金を路銀にして、早う国へ去にや、ヤ、必ず／＼煩ふてばしたもんな」と、金を渡せば押し戻し

「アイ、嬉しいうござんすれど、金は小判といふ物を、

たとと持つてをります。そんなりやまうさんじます、忝なうござります」

と、泣く泣く立つを引きとゞめ、無理に持たして塵打ち払ひ

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、今一度顔を」

と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残り惜げに振り返り

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の観音様」

父母の、恵みも深き粉川寺

泣く泣く別れ行く跡を、見送り見送り延び上り

「コレ娘、ま一度こちら向いてたも、ま一度こちら向いてたもいの。折角長の海山越え、艱難してあこ

がれ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、
名乗らで退かす母が気は、どの様にあらうと思ふ、
狂気半分、半分は死んでゐるわいの。まだ生い先の
ある子をば、親故路頭に立たすか」

と、その儘そこにどうと伏し、消え入るばかり嘆き
しが、起き直つて涙を押へ

「イヤイヤ、どう思ひ諦めても、今別れては又逢ふ
事はならぬ身の上、たとへ難儀がかゝらばかゝれ、
又その時は夫の思案、程は行くまい追付いて、連れ
て戻らう。さうじや、さうぢや」

と子に迷ふ、道は親子の別れ道、後を慕うて

こいにようぼうそめわけたづな

恋女房染分手綱

〔解説〕宝歴元年（一七五一年）竹本座初演。吉田冠子・三好松洛の合作による全十三段の時代物。近松門左衛門の「丹波与作待夜小室節」の改作とされていますが、十段目「道中双六の段」、それに続く「重の井子別れの段」は、原文がそのまま使われています。

〔あらすじ〕丹波の藩主由留木（ゆるぎ）家の家老、伊達与之兵衛のせがれ、与作は竹村定之進（たけむらさだのしん）の娘重の井と通じ、与之助という子を設けますが、悪者の讒言で国を追われ、馬追いとなります。その後、重の井は由留木家の調姫の乳人となり、関東へ興入れる姫君のお供で江戸へ出発しようとしています。

数え年でまだ十二歳と幼い調姫は、関東へ行くことを嫌がりむづがっているので、門前の馬方三吉が持っている道中双六で機嫌をとることにします。一番に上がった姫はすっかり機嫌を直して早く東へ行こうと言いついでした。

重の井は三吉に菓子等を与えてねぎらいます。三吉はお乳の人の名が重の井と聞いて、そんならわしの母さんだと取りすがり、守り袋を証拠に見せて、「行方の知れぬ父を捜し、親子三人で暮らしたい、他に望みはない、昼は

馬追い、夜は草鞋を作って両親を養う』と健気に言います。重の井は、三吉が我が子と悟りつつ、三吉と姫君が乳兄弟であるとはわかったら、姫の嫁入りのじゃまになると思い、「今は母でも子でもない」と泣く泣く言い聞かせ。三吉は、父の帰参がかなうよう殿様をお願いしてくれと頼みますが、母は聞き入れずに追い立てます。泣く泣く出て行く三吉の後ろ姿に、重の井はたまらず声をかけ、手持ちの金を渡そうとしますが、三吉は母様でもない赤の他人に金をもらう理由はないと言います。

いよいよ花嫁の行列の出発。重の井はそしらぬ顔で、姫君の慰みのために三吉に馬子唄を歌わせよと命じます。三吉は涙声に馬子唄を歌うのでした。

道中双六の段

たつ年月も迫り来て、由留木殿のお湯殿子、調の

姫、はや十二歳になり給へば、かねがねの約束にて、

東の高家入間殿へ御婚禮極まり、蕾から取る花嫁御

けふ旅立ちの御供揃へ、上下ざぶめき賑はえり。刻

限は巳の上刻との定めにて、お迎ひの主家老本田弥

三左衛門、数献の盃、足もとはよろ／＼と、猩々緋の

道中羽織、白いところは髪ばかり、きんか頭に顔色

も、しゆちんの立ッ付け、りりしげに

「何んと／＼お供廻りが揃つたらお先手から乗り出

し召され。コレサ文左、源吾左、身はおさへを乗り申

す。万事夜前申し渡す通りだ。若党仲間あらしこ小

者に至るまで大洒をいたさないやうに、馬つぎ船渡

し等にて強気がさつを仕つたらば曲事でおじやん

べい。またとさ泊り／＼の赤前だれにじやらくら致

さないやうに。第一御乗物の先で見苦しい。さりな

がらとさ、長の道中下々が退屈致すべい。もしぬれ

などを企つるとも目立たぬやうに物影へ寄つてちよ

こ／＼／＼と濡れたがよくおんじやる。めでた

き折からと申し、ことに女中のお供だ。少々の事は

見通しにして置き召されつちや」

「あつ」と答へて宰領ども、「サア御立ち」と催すと

ころに、奥より女中声々に

「ア、待たつしやれ／＼、気の毒やお姫様、『関東へ

行くことは嫌ぢや／＼』とやんちゃばかり御意なさ

れ、お袋さまも殿様もたらしつ叱つゝ遊ばせども、

『どうでも嫌ぢや』とおむつかり、お乳の人の重の

井殿、いろ／＼と申されても『それほど江戸へ行き

たくば、乳母ばかり行きをれ』と、お乳の人の背中を

とん／＼とぶたしやんして、御機嫌がそこねました」と云ふところへ、眉泣きはがし姫君は

「江戸も東もこちや嫌ぢや。おれは行かぬ」

と泣く／＼走り出で給へば、侍衆も下々も御門にかけ出で、家老のほか男ざれこそなかりけれ。お乳の人色を変へ

「コレ申しお姫様、下々の子供さへ、九つ十では物の聞き訳ござります。あれ見さんせ。百里あちらの山川越えて、白髪かづいた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに参つて、江戸へござれば入間殿の惣領嫁御とかしづかれる御身ぢやぞや。お乳の育ての難になれば女でこそあれ、この乳母は腹を切らねばならぬ。サアよいお子ぢやお輿に召せ」

とおどしてもそやしても

「いや／＼みな騙しぢや、なんの東がよいところ。

腰元どもが唄うを聞きや。サアみんなこゝへ出て、いつもの歌を唄へ／＼」

とせめ給へば、お伽小姓の頑是なし、十二三なが手をそろへ

へ山も見えざるかりそめに江戸三界へ行かんしていつ戻らんすことぢややら、殺して置いていかんせの、放ちはやらじと泣きければ

「ア、おきや／＼。お大名の宮仕へ、琴の組でも唄はいで誰に習うて端手な歌、姫君などに教やんな。必ず置いて貰はう」

とお乳の人の不機嫌さ、本田もあまりせんかたなく「申しお姫様、あれは人の口てんごう、花のお江戸は京まさり、浅草上野の花盛り、まった堺町木挽町のでんつく／＼でこの坊、弁慶や金平がえいやつと／＼、えいなどと斬り合を見せませう。道中の面

白いこと富士の山と申す天まで届く山を御目にかけてます。先年身どもが御結納の御使者に参つたときはお姫様はまだお二つ。なにとぞ御婚禮のお迎ひに参りたいと申したが、光陰矢の如しと今年丁度十一年。そのやうにやんちゃおつしやるまで長生きを致さうとは存ぜんんだ。さあ／＼御機嫌直して早うお輿に召しませい」

と力いっばいすかしても

「いや／＼江戸へは行きはせぬ。どうでも嫌ぢや」と泣き給へば、お乳もいまはあぐみ果て

「どうしてよからう」

御家老も、あきれてこそはいたりけれ。お仲居の若菜門外より走り入り

「ナウお乳の人様おもしろい事がござります。十ばかりの剃りさげのちつぽけな馬方が、道中双六とや

ら東海道の絵を広げ、味なこととして遊びます。御機嫌直しにお目につけなされませ」

「オ、ようぞ気が付いた。それは聞き及んだ。道中の絵を見せまし、お心も移るため馬方でも子供は大事ない。お赦しぢや、その丁稚に持つて参れと云うておじゃ」

「心得ました」

と御門に出で、連れ立ち来たる。馬方が片肌ぬいでさばき髪、御前近くも不遠慮に縁先に揚げ足して

「ヤレ／＼／＼ありさまたちはあたつぽこしゆもない、朋輩どもとかげどくに道中双六打つて、沓の銭ほどしてこませうと思うたに、人呼び廻つてなんでやる。ハレヤレ／＼／＼きり／＼乗らつしやれ。馬やろい」

とぞつかうどなる

「てさて利巧な野郎ぢやな。船頭、馬方、お乳の人、こちもそちらと同じこと。シテ年はいくつ名はなんといふぞ」

「年は今年十一。五つの年から馬追うて、一代若衆にならずに生へぬきの念者ぢや。ところで名は自然薯の三吉といひやんす」

「才、さッてもよい名ぢや。聞けば道中双六があるげな、腰元衆も打つて見や、姫さまもあそばせ。サア三吉もこゝへ来い。苦しくない」と呼びければ

「あい」と云ふより慮外をも返り短かき煙管の煙。立ちまじりたる女中の傍、そくはぬやうに見えざるは、さすが童の一徳と、絵を取り出し、双六をみな打交り遊ばるゝ

「これ／＼御覽ぜ打たしやんせ。これこそ五十三次を、みながら歩む膝、膝栗毛馬はいい道中双六。南

無諸仏分身と、書いた六字を六角の、賽は桜木花の都を真ん中に思ひ／＼のしるしを置いて、さらばこちらから打出の浜。大津へ三里こゝで矢橋の舟賃が出舟。召せ／＼旅人の乗りおくれじと、どき草津。お姫様よりまづ乳母が餅。一口二口みな口どちやうをどり越え、坂へ越すのも賽次第。賽を振れ／＼。降るや鈴鹿をあとに下れば負けまいと急きに関より亀山に、煙草火打ちの石薬師。オット桑名の、舟渡し。所々の名物買うて、お錢あしつく／＼手鞠子に、ひいふうみいよ、府中江尻にすつとんとん。とんと打つたる、沖つ波松原はるゝ、膏薬買うて月を吸ひ出せ清見寺。由井蒲原や吉原の花の蒲焼き名物の、うなぎの肌沼津の宿。三嶋越ゆれば箱根へ三里。賽目次第に関越ゆ

重の井子別れの段

る。悪い目打てば手判を取りに、元の京都へ立ち帰る、合点か」

「オ、呑み込んだ」

「小田原外郎大磯平塚藤沢の、さはりもなしに双六のさい先もよし門出よし。道中早めて戸塚はと急ぐ保土ヶ谷神奈川越え、川崎を越え、品川越え、まつさきがけのお姫様。一番勝ちの勝色の花のお江戸に着き給ふ。一のうらは双六の幸ひあり悦びあり、慰みありける道中」

興にぞ入り給ふ

お傍の衆に囃されて幼な心の姫君

「かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サア／＼行かう、早や行かう」

「ヤアござらうと仰るか。そりやめでたいわ／＼、
またもや御意の変はらぬ間に、行列揃へ」

と立ち騒ぐ。お乳の人は勇みをなし

「そんなら今一度大殿様お袋様とお盃。これも馬子殿お陰ぢや。出かいた／＼そちには礼言ふ褒美やる。そこに待ちやや」

とぎょめき渡り、奥にお伴し入りにけり。お乳の人は大高に、お菓子様々文庫に盛り入れ

おおだか

「ドレ／＼三吉そこにか。マアそちは健者ぢや。道

けなもの

中双六お目にかけてそれ故に姫君様、お江戸へござろ
と御意なさるゝ、お上にもご機嫌、これは御前のお
菓子ありがたう頂きや。お錢三筋買ひたいもの買
やゝ。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あ
らば、お乳の人の重の井に逢はうと言や。見れば見
る程よい子ぢやに、馬方させる親の身はよくくで
あらう」

と、いと懇ろねんこの詞の末、三吉つくぐ聞きますまし

「由留木殿の御内、お乳の人の重の井様とはお前か。
そんならおれが母様」

と抱き付けば

「ア、こは慮外な。おのれが母様とは、馬方の子は
持たぬ」

と、もぎ放せばむしやぶり付き、引き退くれば縋り
付き

「何のないことを申しませう。わしが親はお前の昔
の連れ合ひ、このご家中にて番頭ばんがしら、伊達の与作。そ
の子はわし、こな様の腹から出た、与之助よのすけはわしぢ

やわいな。父様は殿様のお気に違うて、国をお出な
されたは小さい時で覚えねど、沓掛の乳母が話には、
母様も離別とやらで、殿様にご奉公。『こなたを乳母
が養育し、父様に逢はせたいと思へども、甲斐もない、

母様の細工の守り袋を証拠に、由留木殿のお乳の人
重の井様と尋ねよ』と懇ろに教へて乳母はおれが五
つの年、久しうたん疲わすらを患ふて、鳥羽の祭の餅が咽喉のどに

詰こみまったやら、つひ死んでのけました。乳母が子の

一平いちへいは父様を尋ねに行く、在所の衆が養うて、やう

く馬を追ひ習ひ、今は近江おうみの石部いしべの馬借ばしゃくに奉公し
ます。コレ、守り袋を見やしやんせ。何の嘘を申し
ませう。お前の子に紛まぎれはない。ほかに望みは何に

もない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人、一所に
ゐて下され。見事沓も打ちます。この草鞋わらじもわし
が作った。昼は馬を追うて夜は沓打ち草鞋作り。父
様母様養ひませう。父様と一つにゐて下され。拝み
まする母様」

と取り付き抱き付き、泣きぬたり。お乳は『ハツ』と
気も乱れ、見れば見るほど我が子の与之助。守り袋
も覚えあり、飛び付いて懐に抱き入れたく気は急げ
ども

「アツア大事のご奉公養ひ君のお名の瑕きず、偽つて叱
らうか、イヤ可愛げにさうもなるまい、マアちよつ
と抱きたい、ア、如何なる因果な生まれ性。現在我
が子に馬追ひさせ、男の行方も知らぬ身が、母は衣
裳を着飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つ
たとて、これが何になる事」

と声を、忍びに泣くばかり。懐中のあり合ふ一步十
三袷ふくさ紗たしなに包み

「これ嗜みに持つてゐや」

と、涙ながらに渡さるゝ、三吉見返り恨めしげに

「母でも子でもないならば、病まうと死なうといら
ぬお構ひ。その一分もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の
与作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貰ふ筈がな
い。エ、胴欲な母様覚えてゐさつしやれ」

とわつと泣き出すその有様、母は魂消え入つて

「養ひ君お家のご恩思はずば、さて一人子を手放し
てなんのやらうぞ。奉公の身の、浅ましや」

と悶え、焦がれて嘆きける。時に奥口ざゝめいて

「早や御立ち」

と姫君の、お輿昇き上げ行列立て、お乳の人の乗り
物を、ひら付けにこそ昇き寄せけれ。お乳はさあら

ぬ顔付きして

「姫君のお伽に、最前の馬方をこの乗り物に引き付け、お慰みに唄はしや」

「畏った」

と宰領共

「コリヤそこな自然薯め。唄ひをらう」

とぎこつなく

「ヤアこいつは吠えをるか」

「何ぢやこりや忌々しい」

と握り拳を二つ三つ、頂きながら泣声に

へ坂は照るくく、鈴鹿は曇る、土山間の、つちやまあい間の土山、

雨が降る

降る雨よりも親子の涙なかに、しぐるゝ雨宿り

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予め

了承ください。